

## 「看護」

私の父は13年前、咽頭がんを患い、手術をしました。当時、私は看護や医療には全く関心をもっていませんでした。父が癌である、喉を切る、声を無くす、食べ物の味がわからなくなるらしい。母伝えに聞き、私は何かわからない恐怖と不安と深い悲しみでいっぱいになりました。手術入院の前日は父が食べたい言うものを兄弟総出であちらこちらに買いに走り、父の好物ばかりを並べて家族で食卓を囲みました。父はせっかちな性分で食事も入浴にも時間をかけない人です。しかしその日は時間をかけてゆっくりと、一口ふくんではその味を確かめながら記憶に焼き付けているように見えました。「明日になったら、この味もわからんようになるんやなあ」とつぶやく寂し気な表情を忘れることができません。手術の日の朝、私が病室を訪れると父は、吹っ切れたようにさわやかな顔をして、家族を前にしてベッドの上にあぐらをかき、座っていました。私はなんと言葉をかけていいのかわかりませんでした。母は身の回りの荷物を整理して忙しそうに動き回っています。そんな中、看護師さんがお迎えにやってきました。父は小さくうなずくと、いつものように早歩きで先頭を切って歩いていき、やがてストレッチャーの上に寝た状態で家族の前に姿を現しました。その父は小さく無力に見えました。兄は「がんばれよ」と声をかけましたが、父の顔を見るのが精いっぱいでは何も声を掛けることは出来ませんでした。母は、父の手を握り「あとでね」と言いました。父は「行ってくる」と笑顔で手を振って、手術室に入っていました。手術後、父を見るのは怖い気がしてなかなか足が病院に向きませんでした。病院に父を見舞いに行ったのは手術から1か月後でした。病室をおそろおそろのぞくと、声をなくした父と看護師さんが笑いながら話をしていました。声門を摘出し、発声ができない父は声をだそうとしても私にとっては息が漏れる音でしかありません。そんな父の声にならない声を看護師さんは理解しているように見え、うらやましく思いました。それ以降、父は人口喉頭を使用し発声しているため私は、父の肉声を思い出すことができません。おぼろげに、かすれた声であったように記憶しています。父は、治療に前向きで入れたのは、家族だけでなく信頼できる先生と、入院中担当して下さった看護師さんの支えがあったおかげだと言います。私は、あの時の看護師さんのようになりたいと思っています。今、看護学生の私を「あの泣き虫がねえ、看護師なんてねえ」なんて両親は笑います。半年前、その父はがんを再発しました。中咽頭がん。手術はせず、自然体で生きると言っていた父。「生きてください」と家族で説得し、ようやく手術を決断。舌を全摘出しました。77歳の高齢の体には侵襲の大きい手術でした。当初の予定では三か月の入院でしたが、胸の筋肉を舌の摘出部に再建した予後が不良で、傷がふさがるまで半年の月日を要しました。入院中「手術は失敗したんやな」と、先が見えない入院生活に絶望していた両親。私は、できる限りの時間を病院で両親と共に過ごしました。筆談での父との会話。退院の日、「お前がいてくれたから手術を決断できた」と父が書いてくれました。小さな「ありがとう」の文字と。お父さん、お母さん、私は、家族のように「声にならない心の声」も汲み取ることができる看護師になることを誓います。